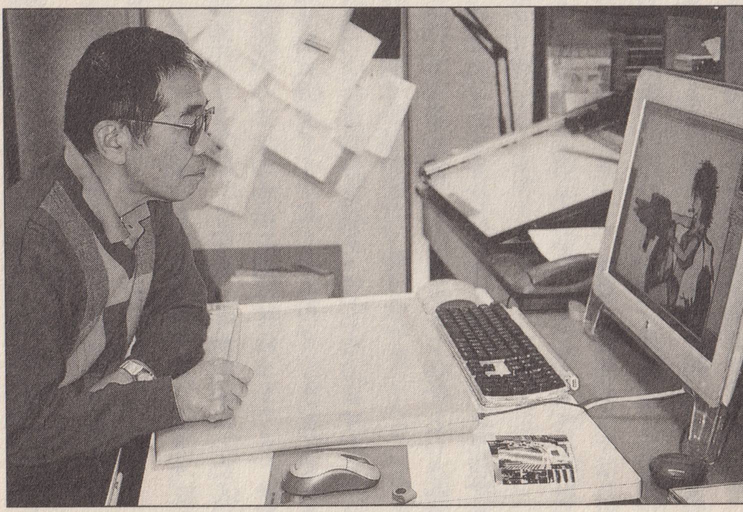
モンキー・パンチ スペシャルインタビュー

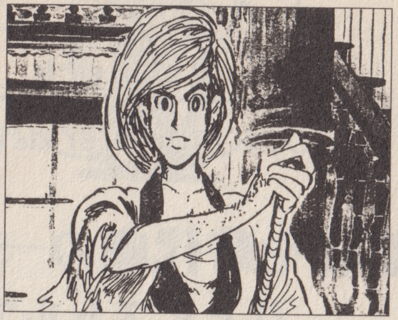
Monkey Punch Special Interview

「西部劇や時代劇の一騎打ちを、刀とピストルで表現できればおもしろいと思った」



漫画家モンキー・パンチ。
日本漫画界の至宝の一人だ。
『ルパン三世』をはじめ多くの人気作品を生み出している。
おそらく、その数は100タイトルを超える。
今回、このシリーズにあたり、
氏の漫画人生、制作裏話を痛快に語ってもらう。

『ウエスタン侍』は、アメリカ西部に侍(右)が出現。刀でガンマンに挑んでいく侍は、まさに五右エ門(下)そのもの。





刀が拳銃に負けるっていうのが歯がゆくってね。

――この『幕末ヤンキー』は、「新撰組」がテーマになっています。時代劇というのは、テーマとしてお好きなんですか。

MP じつは、時代劇、けっこう好きなんですよ。「新撰組」もそうだけど、「座頭市」なんかにしてもすごく興味があったんです。

――先生の今までの作品を調べてみましたら、今回取り上げた作品のほかにも時代劇をテーマにしたものがいくつかありまして……。

MP もう二十年以上も前のことになりますから、あまり記憶にはないんだけど、何本か描いたはずですよ。

――その作品群の中で、『ウエスタン侍』という作品がありました。その中で描かれているキャラクターが『ルパン三世』の五右ェ門にそっくりなんですが……。

MP （『ウエスタン侍』のコピーを見ながら）これは、そうですね。五右ェ門の前身ですね、きっと。僕は、西部劇もやはり好きで、西部劇のなかに侍を入れたら、どうなるかな、なんて考えて描いていましたからね。「忠臣蔵」なんかもテーマにしたことがありますよ。四十七士の中に外国人が一人いるっていう設定だったんです。今でも、あの作品はやりた

いなと思うことがあるんです。そういうのが……やっぱり好きなんだね。連載していたとき、僕、かなりノッて描いてたんです。でも、途中で掲載していた雑誌が廃刊になっちゃったのね。それで、そのままになってしまったんだけど……。

——今回収録した作品、『幕末ヤンキー』『ミスター侍』でも、物語の設定上は、同じような考え方なのでしょうか?

MP　そうですね。ある文化の中に、異文化の人間をポツンと入れてしまってね。そうなると、どうなるのかなあ……と自分で楽しんじゃうんだよね。読者が楽しむ前に、僕自身が楽しんでいるんだなあ。

「三銃士」の話も好きでねえ。たぶん、『ミスター侍』の場合は、西欧の強い奴と日本剣士とからめたらどうかと考えたんだね。だから剣の達人を、全然違うところに放り込んだ場合、どういう話を描くことになるんだろう、というのがけっこう楽しみだったんですね、きっと。刀の切れ味……そういうのを出したいなと思って。絵的におもしろいと思ったんじゃないかな。

——『幕末ヤンキー』では、刀と拳銃が戦います。

MP　そうそう、刀が拳銃に負けるっていうのは、なんとなく歯がゆいところがあって。なんかで勝つ方法はないだろうかって考えた記憶はあ



ある文化の中に、異文化の人間を入れる。モンキー・パンチ氏の発想のおもしろさだ。

りますよ。拳銃に勝つ方法っていうのは、実際はできないんだろうけどさ。まあ、マンガでならできる、というね。

西部劇でも、時代劇でもよく出てくる話なんですが……一騎打ちの話が好きなんですよ。黒澤明の『七人の侍』のアメリカ版、『荒野の七人』という映画があるでしょ。あれで、ジェームズ・コバーンが決闘で一対一で戦う場面があるでしょう、ああいうのが好きでね。そういうのを漫画の中で表現したかったんだね。だから、刀とピストルの一対一みたいなのが絵的にうまくできればおもしろい、というところですね。

沖田総司には書生みたいなイメージがあるんです。

——主人公を、ヤンキーともう一人、沖田総司にしていますけど……。

MP ああ、そうですねえ。土方歳三もいいんですけど……。僕は、沖田総司のお墓まで行ったことあるんですよ。沖田の墓は、麻布の専称寺（せんしょうじ）にあるんです。

——沖田は、お好きだったんですか？

MP うーん、そうですね。なんかこう、謎めいたとこがあるような気がするんですね。沖田の場合、資料もあんまりないんですよね。土方とか近藤勇なんかだとけっこう資料があるんですね。三人の中でも一番資

料が少ないんですよ。沖田には「お光」というお姉さんがいましてね……。彼が結核を患ったとき面倒をみたのが、そのお姉さんです。しかし、そのあたりまでしか資料がなかった。

——描かれる前は、かなり綿密に資料をお調べになったのですか？

MP いやいや、そんなに調べないよ。当時、調べながら描くなんていう時間はなかったもの。要するに、今まで、読んだり見たりして記憶に残っているものとかね、そういうものだけですよ。

——そのころ、どのくらいお忙しかったのですか？

MP 一晩でね、50枚描いたことあるんだよ。最高記録だけどね。月にすると400〜500枚は描いていたかもしれない。プライベートな時間なんてほとんどなかった。

——そんな中でも、お墓参りに……。

MP 沖田だけは調べようとしたんです。でもね、ああ、ほとんど資料ないな、というのだけわかったんですよ。それで、そのままになってしまったんです。

ドラマ、映画、小説……いろいろ、沖田は描かれているけど、その中でも、司馬遼太郎さんの『燃えよ剣』の中で描かれている沖田総司が一番好きなんです。一言で表現すると、書生っぽい感じがして、僕のイメ

ージにぴったりくるんですよ。

「新撰組」は好きだったね。キャラクターがはっきりしているから好きなんですね。新撰組にしても、「座頭市」にしてもね、また「ダルタニヤン」にしてもキャラクターがしっかりしてるのね。そういうのがいいんですね。僕にとっては、とても描きやすいんだよ。

漫画を描くときには、脇役を大切にしているよ。

——映画から受けた影響ってありますか？

MP 多いですよ。「座頭市」なんかからもいろいろ学ばせてもらいましたよ。映画のキャラクターからも影響を受けています。「007」なんかもその一つだね。出てくるキャラクターがスマートでかっこいいっていうか……そういうものの影響が僕の漫画には出てきていると思いますよ。

——『ルパン三世』は、「007」の影響を受けているんですか？

MP ありますね。「007」には、大人の遊びっていうか、大人感覚っていうの……当時、そういうのが、映画にしても漫画にしてもあまりなかったんですよ。「007」は、そういう意味でとても斬新に見えたんです。僕には、「大人の感じ」というのが痛烈に残ってしまったんですね。それに、映像としてもおもしろかった。007とボンドガールのからみ、

Monkey Punch Special Interview



不二子は、ボンドガールから生まれたから、お色気がたっぷり!?

それもよかった。『ルパン三世』の場合、ボンドガールは不二子なんですね。だから不二子は、当然のごとくルパンとからむわけですよ（笑）。

――ジョン・ウェインの映画なんかは？

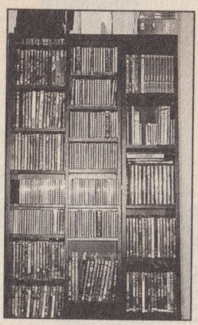
MP ジョン・ウェインはだいぶ見てましたね。ジョン・ウェインの作品は、わりとストーリーのほうを気にして見ていましたね。

――漫画を描かれるとき、アイデアなんかはどうなさっていたんですか？

MP 忙しかったころの話？……あのころはアイデアをゆっくり考える時間なんてほとんどなかったんですよ。一本描き終えたら……終わったものは、すぐに忘れてしまうんです。そしてすぐ次の漫画にとりかかる、という感じでしたからね。だから、紙を汚すことしか考えてなかったんじゃないかな。白い紙じゃ編集の人に渡せないから、汚すことばっかり（笑）。

――ひらめくんですか？

MP 漫画家はねえ、ほとんどひらめきですよ。ほかの漫画家さんも同じだと思いますよ。出版社から電話がかかってきて、「今度こういうので、いかがでしょうか？」っていわれて、そのときに頭にパッと浮かばなかったら作品にならないんですよ。第一回目の電話の途中で頭に浮かんで



映画マニアのモンキー・パンチ氏。DVDは、1000枚を超えているとか。

きたときっていうのは、作品ができあがるんですね。浮かばなかったらいつまでたってもできあがりませんね。連載をしていても、まったくそれと一緒のこともあるんです。頭にパッと浮かんだときは描けるんですよ。だめなときは締め切りがきても描けない（笑）。

——先生は、主役よりも脇役が大切だとお考えのようですが……。

MP　そうですよ。主役っていうのはねえ……みなさん、主役のほうにいくんだけどね。脇役のほうがだいじなときが多々あるんですよ。いい脇役だとストーリーは広げやすいですよ。脇役がいま一つだと、制約ができてしまう。ストーリーを広げにくいよね。例えば、あるストーリーを考えたとしても、そこに出てくる脇役が浮かばないと、おもしろくもならないし、描いていて、自分自身でつまらない（笑）。脇役が素晴らしいときっていうのは、描いていてもノッてくるんだよね。そうすると主役がいきてくるんだよね。

——以前、「とっつぁん」を気に入っていると……。

MP　銭形ね。ルパンのライバルだからね。銭形のほうが描きやすいっていうか……銭形のほうに気持ちが入ってるから、ストーリーが作りやすいっていうのがあるんだよね。やはり、漫画はね、自分が楽しみ、ノってこないといい作品にはならないと思うよ。